



Title	ソ連のフランス語研究について
Author(s)	水野, 義明
Citation	明治大学教養論集, 80: 37-56
URL	http://hdl.handle.net/10291/8966
Rights	
Issue Date	1973-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

ソ連のフランス語研究について

水野義明

I. はじめに

わが国のフランス語研究は既に明治以前からの長い歴史をもち、学校教育の中でも英語、ドイツ語と並んで重要な位置を占めている。これは日本とフランスとの地理的隔絶、文化の異質性、植民地的従属関係の欠如などを考えると、きわめて注目すべき現象であり、日本の近代化の過程の中でフランス語が大きな役割を演じてきたことを物語るものであろう。

一方、現在の米国では、フランス語の学習人口は、スペイン語、ラテン語に次いで第3の地位を占めている。「言語学の現況」第1巻に収められているJ・オーンステインの論文（文末参考文献（6））によると、1959年秋学期に米国公立高校で外国語クラスに登録された学生2,200,000人（全体の27%）の、選択外国語別の100分比は下記の通りである。

スペイン語36.2%、ラテン語29.2%、フランス語27.4%、ドイツ語5.6%、イタリア語1%、ロシア語0.3%、その他0.3%

この数値は、ラテン語の場合を除けば、多民族国家としての米国の、非英語系民族の比率や歴史的、文化的事情を或程度反映しているように見える。ラテン語はいわば欧米文明の古典語であり、日本人が漢文を学習するのと同じ事情があって、学習人口も多いのであると思う。

このような日米両国でのフランス語研究又は学習の情況に比べると、ソ連でのフランス語学には、歴史的、文化的背景を考慮に入れた場合に次のような

特色が認められる。

1. フランス語研究の確立が比較的新しい。
2. 諸外国語、特に英語、ドイツ語に比べてフランス語の地位が相対的に低い。

この論文では、以上の2点を中心として近年のソ連のフランス語研究と教育の実情について概観してみたいと思う。文中引用書などに付した番号は文末の参考文献のリストの番号を示す。

II. ソ連のフランス語研究の沿革と現状

ソ連のフランス語研究は帝政ロシア時代にロマンス諸語研究の一部門として前世紀の末頃成立したことに遡る。「ソビエト言語学の50年」の中で「ロマンス語」の項目を担当した N. A. カタゴーシチナ (1) は次のように述べている。

「学問の一部門としてのロマンス語学 Romance philology の基礎は、ロシアでは19世紀末に作られ始めた。しかしこの時代にはロマンス諸語の研究はロマンス文学研究に対する補助的部門のようであった。……」

もちろん言語としてのロマンス語の講義やセミナーは専門家達によって行なわれていたわけであるが、彼等は同時に文学の研究者でもあり、古代ロマンス語の研究の場合にも、古いロマンス文献や遺文の解説という実際的要請が先立っていた ((1) p. 130)。ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、ハリコフ、カザンなどの大学ではロマンス・ゲルマン学部が設置されていた。研究の成果はあまり多くはなかったが、すでにロマンス語比較文法、ロマンス語起源論、プロヴァンス語の形成発展、ルーマニア語に対するスラヴ語の影響などが問題とされていた ((1) p. 130)。

革命後は、ロマンス語の専門家養成の必要が痛感されるようになり、レニングラード、モスクワ、キエフ、ハリコフその他の大学にロマンス・ゲルマン学部が設置されると共に専門的語学教育機関も開設され、更に各国の学士院に相当する「ソ連邦科学アカデミー」にはロマンス言語部門が新設され、ロマンス

言語学についての修士、博士等の学位審査制度が作られた ((1) p. 131)。

以上のような事実から、ロマンス語の理論的研究がソ連で本格的に始められたのは、1917年の社会主義革命後であると考えてもよい。

カタゴーチナはソ連のロマンス語研究を2つの時期に区分している。第1期は革命後から1940年代の末まで、第2期は1950—60年代である。(この境目となっているのが1950年のいわゆる「言語学論争」であり、これについては参考文献(9)にその概略が述べられている。)以下ではカタゴーチナの叙述に従って、ソ連のロマンス語学、特にその中心をなすフランス語研究の発展における主要な事項を年代順に追っていくことにする。

1. 第1期(1917年——1940年代末) 第1期の特徴は研究範囲がきわめて狭く、主としてフランス語が対象とされていたことである ((1) p. 131)。前述のように大学等の高等教育機関にフランス語課程が設置されると、フランス語史、音声学、理論文法などの分野で適当な教科書や教材が必要となってくるが、この要請に応じて刊行されたのが、L. V. シチュエルバの「フランス語音声学」1937年(Л. В. Щерба《Фонетика французского языка》)である。これは、音韻についての著者独自の考えに基づいてフランス語とロシア語の発音を比較したもので、ソ連のフランス語音声研究の基本的労作とされている ((1) p. 131)。これと前後してシチュエルバは更に「口仏辞典」1936年(《Русско-французский словарь》)を完成させた。これは、L. テニエルの書評(Л. Теньер,《Вопросы языкознания》1958, No. 6)によれば語論についてのシチュエルバの理論の応用であって辞書編集技術を変革するほど独創的であるといわれる ((1) p. 131)。

一方、文法の分野では「ロシア最初の大学用フランス語理論文法書」((1) p. 131)であるO. I. ボゴモロヴァの「現代フランス語——理論的講義」1948年(О. И. Богомолова《Современный французский язык——теоретический курс》)がある。この本の特色は、テキストが精選されていることと、当時の海外の文法思想の流れを紹介していることである ((1) p. 131)。

フランス語の歴史的研究では、**M. V. セルギエフスキー**の「フランス語史」**1938年**、**1947年** (**M. B. Сергиевский** 《История французского языка》) が挙げられている。カタゴーシチナによれば、この本はフランス標準語 **French national written-literary language** の形成の歴史的条件を論じ、特に標準語と地域語 **français régional** との相互関係を究明している。ただし当時ソ連に横行したマール言語学の影響を受けて、言語を上部構造としている点も指摘される ((1) p. 132)。

この間、フランス語以外のロマンス語についても研究が進められて、たとえばスペイン語では革命後最初の教科書である **O. K. ヴァシリョーヴァ=シュヴェーデ**の「スペイン語教程」**1937年** (**O. K. Васильева-шведе** 《Учебник испанского языка》) や、その増補版である大冊の「スペイン語講義」**1948年** (**《Курс испанского языка》**) が出されている。しかし、一般には、ソ連領内の少数民族の言語であるモルダヴィア語 (ルーマニア語の一方言) の研究が盛んであったほかは、ロマンス語研究は概して低調であった ((1) p. 132)。

前述の**セルギエフスキー**には、更にロマンス語全般についての研究もあるが、総じて「この時代には、言語史的課題 **historico-linguistic thematics** の隆盛が著るしく、研究は通時論の面 **diachronic plan** で行なわれていた ((1) p. 132)。」またこの時代に、現在ソ連で活躍しているロマンス語学者達 (**R. A. ブダーゴフ**, **P. A. Будагов**, **M. S. グリュチョーヴァ** **M. C. Гурьчева** など) による、フランス語についての最初の学位論文が提出されたが、これらの論文はいずれも上述の史的傾向を反映していた ((1) p. 132)。

現代フランス語に関する研究は比較的少ない。中でも注目に価するものは、現代フランス語の組織的記述の最初の試みである **K. A. ガンシーナ**, **M. N. ペテルソン**共著の「現代フランス語」**1947年** (**K. A. Ганшина и M. N. Петерсон** 《Современный французский язык》) である ((1) p. 132)。

2. 第2期 (1950—60年代) 第1期がフランス語の研究を中心としていたのに対し、第2期の特色はロマンス諸語全般に研究領域が拡大されたことであ

る。これはソ連のロマンス語学発展の自然的過程であったかも知れないが、その半面前述の「言語学論争」の結果マール学説の權威が失墜し、ソ連のロマンス語学が機械的唯物論の拘束を脱したという事情もあずかっていると思う。たとえばカタゴーシチナは50年代にはロマンス語起源論への関心が再興したと述べているが（(1) p. 133）、これは言語単一起源説をとるマール学説の支配下では容易に実現できないことである。

この時期に入ると早くも前述のセルギエフスキーは、革命後最初のロマンス語概論である「ロマンス語学入門」1952年、1954年（《Введение в романское языкознание》）を出版している。これはロマンス諸語が民衆の言語から発展したという趣旨のものである（(8) p. 159）。これと並んで重要なのは、前述グリチョーヴァの「俗ラテン語」1959年（《Народная латынь》）である。これは、ロマンス諸語の起源についての学説と俗ラテン語の構造を論じ、併せてテキストと註釈を付けたものである。更に、俗ラテン語から各ロマンス語が生じた過程についても幾つかの論文が書かれたが、中でも俗ラテン語の格変化がロマンス語前置詞構文に置き換えられた経過を論じた E. A. レフェロフスカヤの「後期俗ラテン語における前置詞構文の発展」1964年（E. A. Реферофская 《Развитие предложных конструкций в латынском языке позднего периода》）が挙げられている（(1) p. 133）。

このようなロマンス学の興隆に応じて、全国的な規模の研究組織が作られるのも当然である。1961年にはソ連邦科学アカデミー言語研究所の招請によって「第1回全ソロマンス語学会議」がキシニョーフで開催された。この会議の資料は1963年に論文集の形で公刊された。また、この会議と関連して、ロマンス諸語の比較研究、類型学的 *typological* 研究に関する会議が1964年レニングラードで開催された。更に、1957年、1961年にはロマンス語学、ロマンス・ゲルマン語学についての論文集が刊行された。一方平易な解説書としては、モスクワ大学出版の「世界の言語」シリーズのひとつとして「イタリア語」「スペイン語」「ポルトガル語」が出されている（以上は（1） p. 133）。

フランス語については、この時代には特にフランス語史に関する研究が隆盛した。これは 1) 共時的研究と 2) 通時的研究に分けられる。

共時的研究では、一定の時期のフランス語の動詞、代名詞、名詞等の体系の特性が研究され、通時的研究ではフランス語の各文法カテゴリーの成立が個別的に研究された ((1) p. 133)。

これらの言語史的研究の中でもレーニン賞を授与された V. F. シシマリョーフの「フランス語の史的形態論」1952年、1955年 (В. Ф. Шишмарев «Историческая морфология французского языка») が注目に値する。著者はフランス語の形態の成立過程を論じ、その際古フランス諸方言の役割を強調している。同じ著者によって古代フランス語研究のための文集である「9世紀より15世紀に到るフランス語史に関する読本」1955年 («Книга для чтения по истории французского языка IX—XV ВВ.») が編まれているが、これは単なるアンソロジーの枠を越え、フランス語方言学の貴重な資料となっているだけでなく、フランス標準語は方言を基盤として成立したという著者の見解を表明したものである ((1) p. 134)。シシマリョーフの研究は、史的方言学とロマンス諸語の標準語形成の問題について研究者達の注意を喚起した。1963年に共同執筆されたフランス語史の教科書は史的研究の成果をとり入れている ((1) p. 134)。

史的方言学は主としてフランス語を資料として研究された。1955年及び1957年のカタゴーシチナの論文は、古フランス諸方言の分類とフランス方言 Франсийский の位置付けを問題とした。また、北東諸方言、特にロタリング方言 Лотарингский の特性が研究された。М. ボロージナ Бородина 等の活躍によって言語地理学的方法の意義が認められた (以上 (1) p. 134)。

このほか、カタゴーシチナによれば、フランス語研究についても近年は「構造主義」structuralisme の影響が大きいとされる。もっともカタゴーシチナは「構造主義」を広い意味に解釈し、「言語をまず体系として、一定の『構造』として考えるすべての傾向 ((1) p. 135)」と理解している。たとえば L. I. イリヤの「フランス語の冠詞」1956年 (Л. И. Илия «Артикль во француз-

ском языке》)をはじめとする諸論文はこの傾向に属するとされる ((1) p. 135)。60年代に入って幾つかの文法書が現われているが、それらに共通する特徴は、品詞や文の成分の決定の際の、より明瞭な形態上の標識を求めようとする意図である ((1) p. 135)。1965年には Y. ステパーノフの「フランス語の構造」(Ю. Степанов《Структура французского языка》)が刊行されたが、これは著者の言葉によると構造主義の立場に立つフランス語文法である。(ちなみにステパーノフは構造言語学を中心とする、ソ連では独創的な言語学概論をも書いている(10)。

以上がソ連のフランス語研究発展の経緯である。以下にはフランス語研究の若干の分野における第2期までの主要な研究状況を概観して補足としたい。

シンタクス(構文論)の部門では、前述のイリヤの「現代フランス語のシンタクス」1962年(《Синтаксис современного французского языка》)がある。本書は文の理論についてソ連内外の最新の成果に基づいて従属節の分類や単文の類型などの諸問題を解明したものといわれる((1) p. 135)。

語形成の研究には、1952年から54年に亘って刊行されたソ連邦科学アカデミー編集の「ロシア語文法」(《Грамматика русского языка》)の影響が大きいといわれる。フランス語の研究でも従来は個々の接尾辞や接頭辞に重点がおかれていたが、「ロシア語文法」の刊行後は語形成体系の一部として語形成成分 word-formative types をとり扱うようになったといわれる((1) p. 136)。

語結合についても「ロシア語文法」はロマンス学者の関心を喚起する契機となった。前述のイリヤの学位論文「現代フランス語における語結合の諸類型」1960年(《Типы словосочетаний в современном французском языке》)は代表的である((1) p. 136)。

音声学と音韻論では2つの傾向が認められる。ひとつは実験音声学的な研究であり、前述のシチュルバの指導の下にレニングラード大学で進められ、N.A. シガリョーフスカヤ(Н. А. Шигаревская)、M. I. マトゥセーヴィチ(M. I. Матусевич)などが主要メンバーである。他のひとつの傾向は、種々の文の抑

揚や構文による分解 intonational-syntactic articulation 及び語のアクセントと句のアクセントとの相互関係などを問題とした。P. S. クズネツォフの「現代フランス語の音韻体系について」1941年はフランス語音韻論の多くの問題に独創的な解答を与えたとされている ((1) p. 136)。

文体論については『言語学の諸問題』誌に一般的討論が行なわれ、フランス語学の分野でも R. G. ピオトロフスキーの「フランス語文体論概説」1960年 (《Очерки по стилистике французского языка》) をはじめとして幾つかの労作が発表されている ((1) p. 136)。

比較文法の領域では伝統的な比較・歴史的 comparative-historical 研究も継続されてはいるが、大勢は共時的比較、すなわち比較・対照的 comparative-contrastive 研究に向かっている。特色としては、ロシア語及びソ連の諸民族語とロマンス諸語とを比較検討していることであり、その主要な目的は母国語との比較における外国語学習方法の完成にあるといわれる ((1) p. 137)。たとえば V. G. ガク、E. B. ローゼンブリトの共著である「仏ロ比較研究概論」1965年 (B. Г. Гак и E. Б. Розенблит 《Очерки по сопоставительному изучению французского и русского языков》) はそのひとつであり、同じガクの「フランス語の単語について」1966年 (《Беседы о французском слове》) は仏ロ比較意味論を扱っている ((1) p. 137)。

ロマンス諸語相互の比較研究も行なわれていて、フランス語とプロヴァンス語、イタリア語とサルジニア語の関係についての論文も発表されているが、これらの研究には一般に言語学における共時的研究方法が完成されたことが大いに役立っている ((1) p. 137)。

辞書編集におけるシチュルバの功績については前述したところであるが、彼の辞書編集の原理と方法はその後も継承されて、ロ仏、仏ロ；西ロ、ロ西；ポルトガル・ロシア；伊ロ、ロ伊；ルーマニア・ロシア、ロシア・ルーマニア；などロマンス諸語についての辞書が刊行され、大冊の仏ロ語法辞典 phraseological dictionary も完成している ((1) p. 137)。

「ソビエト言語学の50年」の中でカタゴーチナはこのようにソ連のロマンス語学、フランス語学の沿革と現状を概括したあと、更に一般的問題——思想的基盤についても付言している（(1) p. 139）。それによればソ連のロマンス語学は、ポチェブニヤ、フォルトゥナートフ、ペシュコフスキー、シャハマトフ、シチェルバ、ヴィノグラードフなどのロシア・ソビエト言語学の成果と密接に関連していて、マルクス・レーニン主義哲学を研究の基盤としているとされる。（ソ連における「マルクス主義言語学」の伝統と当面の問題については参考文献（9）（10）を参照。）また最近では国外での研究の成果も充分とり入れられて、変形分析、IC 分析、統計的方法なども適用され、海外ロマンス語学者の著作の翻訳も刊行されているという。

最後にカタゴーチナは、ソ連のロマンス語学の特色は、**理論と実践との結合**であると述べている。研究の成果はそのまま大学の講義や外国語教育の教材に利用される。また一方たとえばソ連内少数民族の言語であるモルダヴィア語の研究は「言語的建設」（多民族国家の言語問題の解決策）に応用されていると述べる。カタゴーチナによれば、ソ連のロマンス語学は、個々の研究者によるのみならずソ連邦科学アカデミーや各民族共和国のアカデミー、諸大学のロマンス語科などの集団的研究によって、その前途は洋々としているとされるのである（(1) p. 139）。

III. 諸外国語中のフランス語の地位

革命前のロシア作家の作品によってもよく知られるように、帝政時代にはフランス語は外国語として圧倒的に優勢で、特に上流階級の間では殆ど日常言語に準ずるほどの地位を占めていた。ロシア語を使うのは粗野で無教養なことであり、流刑地に面会に来た妻と最後の別れをかわすときにも夫はフランス語を用いるのである（N. A. ネクラソフ「デカプリストの妻」1872年）。

しかしながら現在のソ連ではフランス語は嘗ての隆盛を失っている。たとえばこの論文の冒頭で触れた「言語学の現況」中の W. ウィンターの報告するところによれば（7）、1950年から59年に到るあいだにソ連で刊行された非

スラヴ系の印欧諸語に関する研究論文等は 837 篇、50,314 ページに上る。このうち海外の研究の翻訳などを除いたオリジナルな論文は 816 篇、45,410 ページであり、その主要言語別の内訳は、

英 語	110 篇
ド イ ツ 語	85 篇
フランス語	84 篇
ルーマニア語 (モルダヴィア語)	84 篇

である。日本を含めて多くの国々で外国語としては英語がとりわけ重要視されていることは或意味では当然であろうが、私の印象としてはドイツ語の比重が思ったよりも大きいことが挙げられる。これは革命前の時代にはドイツの哲学、経済学、社会思想などがロシアの文化的風土の中で大きな影響力を有していたという事情に由来すると思う。これに対してフランス語はドイツ語と比肩しているとしても、人口 270 万のモルダヴィアの言語（本来はルーマニア語の一方言）と同程度の関心の対象としかならないのは注目すべきである。この論文の前節の終りに述べたカタゴーチチナの見解（「ソ連のロマンス語学の特色は『理論と実践との結合』である」等）に従えば、フランス語の相対的劣勢とモルダヴィア語の相対的優勢についての理由も理解できないわけではないが、いずれにせよソ連ではフランス語が外国語としての実際的メリットを次第に減少させていることは事実のようである。

このようなフランス語の状況は、学校での外国語教育に一層よく反映しているように思われる。前述の「言語学の現況」の中で J. オーンSTEIN はソ連の外国語教育の現状を報告しているが（6）、以下では彼の叙述に即して先ずフランス語学習の実情を紹介し、次にソ連の外国語教育の一般的事情についても参考までに簡単に触れてみようと思う。

オーンSTEIN によれば、ソ連の諸学校では外国語は必修科目 **requirement** となっている。（米国では選択科目 **optional** で登録率は約 30% とのことである。）ソ連の教育省が提供した統計に従えば、1960 年前後の頃の外国語登録状況は、英語 45%、ドイツ語 35%、フランス語 20% となっている。しかしオーン

ステインの入手した公式の数字によれば、労働者学校、農村青年学校、成人学校を除いて正規の中等学校の、1960年から61年にかけての外国語登録状況は下記の通りである ((6) p. 144)。

	*学校数	登録人員	百分比 (人員について)
ドイツ語	64,400	8,249,000	60
英語	22,800	4,530,000	33
フランス語	7,500	1,049,000	7
その他	500	8,000	0
計	95,200	13,836,000	100%

*2つ以上の外国語課程を有する学校は重複して数えた。実際の学校数は 79,000 である。

前掲のウィンターの報告はアカデミックな分野での研究傾向を示したものであるが、ここに挙げたオーステインの統計は学校教育での外国語の実情であり、いわば一般大衆レベルでの外国語意識のひとつの指標と考えてもよいであろう。したがってウィンターの統計とは別の説明を必要とすると思う。

先ずドイツ語の圧倒的優位についてであるが、これは上述のようにロシア文化に対するドイツ語の影響という歴史的背景も考えられ、地理的にも近接している点も挙げられ、更に革命後のソ連では、マルクス主義を建国の基本的理念としたために、マルクス、エンゲルスをはじめとするドイツの思想家、活動家達の名前がソ連の民衆にもよく知られていてドイツ語への関心を高めたという点も考慮すべきであろう。しかし私はそれよりも、英、仏、独の3言語を比較するときに、ドイツ語が言語構造から言っても最もロシア語に似ていることが大きな原因だと思う。ドイツ語とロシア語とは、音声的にも、性、数、格等の文法カテゴリーについても、造語法においても多くの共通点を有している。ソ連のような半ば鎖国状態の国では、国際語としての有用性(たとえば英、仏、西語)とは別の観点から学習外国語の選択がなされることもあり得ると考える。

英語については、ドイツ語に関して述べたところをそのまま逆に適用できる。すなわちアングロ・サクソンの文化伝統の欠如、地理的隔絶、いわゆる「資本主義の牙城」というプロパガンダ、言語構造の相違などが、ドイツ語に対する英語の劣勢の説明となるのであろう。

フランス語についてもほぼ同様の事情を挙げることができるが、帝政時代の隆盛の反動が特に大きいようである。英、仏両語についてオースティンは前述の報告の中でデ・ウィット De Witt の見解を紹介して次ぎのように述べている ((6) p. 145)。

「デ・ウィットは、英語が『今後10年間にソ連の学校でドイツ語に代って第1位の外国語になる見込みはない』と予言している。彼によれば、フランス語が英語やドイツ語に比べてひどく人気がないのは、それが、帝政時代のブルジョアジーやインテリがしばしばフランス語をロシア語と同じように流暢に話したということ、一般の人々に今でもなお思い出させるからである。」

最後にオースティンの報告に基いて、ソ連の外国語教育の一般事情について概観してみる。ソ連では外国語教育は革命後1923年頃までは重視されず、随意科目となっていたが、1932年の法令によって初等、中等学校における外国語教育の必要が認められた。その後戦後になってフルシチョフの教育制度改革により、外国語は初等学校の5年生(11才から12才)から中等学校終了までの6、7年間教科課程に設置されることになった。(しかし全カリキュラムの中の外国語科目の地位は低く、時間数にして帝政時代は20~25%を占めていたのに対し、現在は約6%である。)

一般教育機関のほかに、1955年より外国語の強化教育を目的とする実験学校が設置され、5~6,000名の生徒が登録している。第2次大戦後は英語が重視されるようになり、高等教育機関の入学試験には英、独、仏語が課せられるが、特に英、独語が重要とされている。

外国語教育の実際面では、モデル・スクールの授業はすぐれているが、全体の水準は低い。教科書は「全く伝統的で、いくつかの点で旧式」である。教授

法は文法的検討を主体としていて、応用力の養成に欠ける。これはソ連言語学の特色である「分析的読解」analytical reading、「意識的・比較的」方法、‘conscious-comparative’ method（前述シチュエルバ等の理論の応用であり、テキストの詳細、精密な文法的究明を主眼とするもの）の弊害であるとされる。テープレコーダーやランゲージ・ラボラトリーの利用はおこなわれている。教師は不足しているわけではないが、担当の外国語が用いられている現地に滞在する機会に乏しいので実際的能力が不十分である。また言語学の成果が外国語の授業に応用されていない。……

このような状況は、少なくともオースティンの論文が執筆された1963年頃の事実であった。その後の動向を示すものとして、1961年に出された「外国語研究の改善に関して」という法令が参考となる。その内容は、オースティンの要約に従うと次ぎの通りである（(6) pp. 183~4）。

1) 25人以上のクラスは可能な限り分割すること、2) 幼稚園、小学校での外国語教育に更に留意すること、外国語の実験学校の数を1961~65年の間に700校に増加させること、3) 教員の資質を向上させること、4) 外国語についての課外活動に留意すること、5) 教科書その他の教材を更に多量に作ること、視聴覚教材を充実させること、6) 学習外国語の数を増加させること、7) 成人に対する外国語教育を拡大すること。

これらの措置が順調に実施されれば、外国語教育が量的にも質的にも飛躍的に進歩することは疑いない。オースティンは、現状の不備を認めながらも、ソ連の外国語教育の将来に対して次ぎのような理由で楽観的見解を抱いている（(6) pp. 185~6）。

1) 外国語の価値が一般に認識され、教育当局も教授法の改善を欲している、2) 必修科目となったため龐大な数の学生を擁している、3) 学校教育の初期から外国語をとり入れようとする動きがある、4) 外国語学習の便宜が大学等の教育機関によって年長者に対しても広く与えられている、5) 対象となる外国語の範囲が広く、東洋、アフリカ、ラテン・アメリカの諸言語をも含ん

でいる。

要するに現在の時点で米ソ両国の外国語教育を比較すると、前者は質的に優れ、後者は量的に凌駕していて部分的には前者にも匹敵するということである ((6) p. 187)。オースティンは、ソ連の外国語教育は今「醗酵状態」にあり、「現在もなお変化しつつあって、一層の改革も期待される」((6) p. 187) と述べて報告を結んでいる。

IV. フランス語研究の若干の例

この節では、これまで述べてきたソ連のフランス語学の沿革と近況への補足として、私が通読した範囲での若干の研究論文の論旨を紹介しようと思う。論文は年代順にとりあげた。

1. M. S. グリチョーヴァ「現代フランス語における語彙的多義性の諸類型について」1958年(2)。この論文の目的は、現代フランス語の語彙の基本的意味と派生的意味との相互関係の検討にある。一般に意味論 semantics は M. Bréal に始まるとされるが、現在のところ意味変化と意味発展との法則性の研究は充分ではない。語の多義性 polysémie を作り出す原理には隠喩 métaphore と換喩 métonymie とがある。隠喩は事物の類似による連想関係に基づいていて、人間の身体部分に関するものが多い。たとえば tête (原義‘頭’) 1) 知力, 2) 前部又は首部 tête de ligne (起点), 3) 頭頂部 tête d'un clou (釘の頭)。これに対し換喩は、部分を以て全体を意味させるもので、たとえば main (原義‘手’) は手でつかむ場所を示している。e. g. main courante (手すり); 術語としては main は(吊すための)小鉤、動物の足跡又は脚の皮、かすがいなどの意味がある。また換喩によって生ずる多義性には動物と生産用具との類似に基づくものも多い。e. g. chien (犬, 銃の撃鉄), chèvre (山羊, 起重機), mouton (羊, 鉄挺) など。

通常、語の多義性は、行為、行為の場所、行為の結果の結合によって生ずる

が、特に行為とその結果の結合する例が多い。e. g. *couture* (裁縫, 縫目), *œuvre* (仕事, 作品) など。

この他, 1) 行為と, 道具, 行為者, 方法などとの結びつき, 2) 行為と場所との結びつき, e. g. *allée, entrée* 3) 材料と製品との結びつきなど多くの場合があり, 要するに現代フランス語では換喩が隠喩よりも大きな役割を果していることがわかる。

このような多義性は語の歴史的発展の結果である。(現代フランス語では動詞が最も多義性が大きい。) 史的語論 *léxicologie historique* の課題は, 多義性の諸類型の継承性の確認と, 言語の意味体系の中での個々の類型の比重を決定することである。この類型の主なものとしては, 名詞では, 抽象的行為と 1) 結果, 2) 結果——行為者, 3) 結果——道具, 4) 場所との結合, 及び 5) 材料と製品との結合があり, また動詞については, 1) 物理的行為と心的過程及び頭脳の知覚との結合, 2) 原因と結果との接近による多義性など挙げられるであろう。

2. M. A. ボロージナ「フランス語のシンタクスと形態論との研究について」1960年(3)。フランス語にはシンタクスの研究は多いが, 形態論の研究は少ない。これは, フランス語では文法的(形態的)カテゴリーがシンタクス的カテゴリーに置き換えられてきた事情に由る。しかし現代フランス語においても形態論はかなり重要である。たとえば 1) 性による区別のない形容詞をとりあげてみる。(これには①書記でも発音でも区別のないもの, ②発音のみ区別のないもの, がある。) *Damourette* と *Pichon* は形容詞の性別変化は本質の意味をもつので, 無変化形導入は失敗するだろうと述べている(1932年)。

しかし実際の調査によれば多数の無変化形容詞が用いられている。e. g. V. Hugo “*Les Misérables*” の抽出調査では形容詞全体の40%に達する。H. Bauche は形容詞が性別変化を失う傾向があることを早くから指摘している(1929年)。e. g. *une veuve* → *une femme veuf* など。またこのような傾向は修飾法よりも述語用法に特に強いことが認められる。これは言語の退行 *régression* で

はなく、前進 **progression** と見なすべきである。次に、2) 形容詞の複数指標である **-s** について考えてみる。この **-s** は13~14世紀から発音されなくなっているが、連音 **liaison** する場合は発音される。すなわち形容詞の複数表現は文脈に依存するのである。形容詞は名詞に対して前置、後置の両様の用法がある。e. g. 1) 前置 **les bons enfants**, 2) 後置 **des jours heureux**。連音の結果生ずるこの **[z]** は、いわば句 **phrase** 全体にかかって複数表示の役割を果たしていると言ってもよい。口語ではこの **[z]** が名詞に前接する例もある。e. g. **z'heures, z'ordres**。一般に形容詞が屈接を事実上失ない、名詞が形式規定詞 **formal determinor** をとり込む傾向がある(冠詞、形容代名詞、指示代名詞についても同様)。要約すれば、現代フランス語では、すべての後置の形容詞とかなりの前置の形容詞とが複数表現の能力を失っているのである。

フランス語の発展の基本線は、屈折的形態 **morphologie flexionnelle** から構文的形態 **morphologie syntactique** へ向かっている。したがってフランス語形態論の研究においても、「非屈折的」形態論 **morphologie non-flexionnelle**、語結合の形態論 **morphologie de composition des mots**、構文的形態論 **morphologie syntactique** という観点も可能であり、これによって従来未解決の諸問題も解明されることが期待できる。

3. L. P. ノヴィコヴァ「現代フランス語における前置詞句の分類について」1966年(4)。現代フランス語では前置詞相当句がかなり多く用いられているが、前置詞と前置詞句との意味合いの相違についてはあまり研究されていず、前置詞句の認定も恣意的である。必要なことは、前置詞句を、前置詞との同義性の程度に従って分類し、各前置詞句を言語体系中で前置詞として扱うか、又は特殊用例とするかを定めることである。この仕事は、1) 理論的には言語と言との関係を究明する一端となり、2) 実際的には辞書の編集と外国語教育に役立つ。

前置詞句と前置詞との同義性 **équivalence** は、形式について、及び意味について検討が可能である。形式についてとは言い換えればシンタクスのレベルに

ついでのことであり、これには①能動性向 *valence active* (不定詞, 名詞などを従属語として取り得るもの) と, ②受動性向 *valence passive* (動詞, 不定詞, 名詞, 形容詞などに従属 (依存) するもの) とがある。多くの例を検討した結果, 前置詞句が前置詞機能を失なう場合は下記の通りである。

1) 能動性向がない場合 e. g. **à côté de moi** (前置詞句) → Bernard allait passer **à côté** sans la voir, 2) 他にも能動性向が存在する場合 e. g. **à l'exception de ceux qui...** (前置詞句) → Les photoneutrons... sont tous beaucoup moins énergiques **à l'exception possible** d'un petit nombre de neutrons..., 3) 前置詞句の中心語に能動性向が向けられる場合 e. g. **au sujet de...** (前置詞句) → **à ce sujet**, 4) 受動性向が補語を必要とする動詞に向けられる場合 e. g. **Au nom du bureau politique** je tiens à affirmer que... (前置詞句) → Elle [la proposition subordonnée] s'acrochera **au nom de** la proposition principale..., (= *à le nom de)

要するに前置詞句がその機能を失なうか否かは, 1) その前置詞句の個別的特性と2) その前置詞の構成形式 (モデル) に依存している。1) の個別的特性とは, その前置詞句が他の語彙単位と結合する能力及びその前置詞句の基本成分の辞書的意味を指す。たとえば *avec l'aide de, dans la direction de* などは *avec, vers* などの意味に近い。しかしながら前置詞句の前置詞との同義性の程度は2) モデルによって主として決定される。最も同義性の高いモデルは下記の通りである。

- ① 名詞 (冠詞なし) + *à, de*
- ② *à, en* + 名詞 (冠詞なし) + *de*
- ③ 副詞 + *de* (*près de, au-dessus de*)

より一般的には, 同義性の高いモデルとして次のような前置詞句が挙げられる。

- ① a. 名詞 (冠詞なし) + 動詞 + 前置詞
abstraction faite de...
- b. 前置詞 + *ce qui* + 動詞 (+ 前置詞)

en ce qui concerne...

- ② 名詞（冠詞なし）＋前置詞

histoire de...

- ③ 前置詞＋名詞（冠詞なし）＋前置詞

de façon à..., à cause de...

- ④ 副詞＋前置詞

avant de...

- ⑤ 前置詞＋名詞（冠詞あり）＋de

au lieu de...

これらの前置詞句はいずれも中心語の辞書的意味が中核となっている。

この他、フランス語では、**実在前置詞句**と**潜在前置詞句**を区別することもできる。実在前置詞句とは、既に一定の前置詞の意味をもつモデルとして存在しているものを指し、潜在前置詞句とは、その句のもつ意味の中に一定の前置詞の意味を含んでいるものである。ただしこの両者には、絶対的区別はない。e. g. rapport à...と avoir rapport à..., question de...と il est question de...

現代フランス語では前置詞句の形成は活潑に行なわれているので、今後ともこの方面の研究が必要である。

4. N. A. カタゴーチチナ「フランス標準語発展の歴史的的前提」1968年(5)
ここで「標準語」langue littéraire というのは、次ぎの条件を具えた言語を指す。1) 全國民的言語との結び付き、2) 言語的規範の存在、3) 使用範囲の多様性、4) 国内全域に普及、5) 方言に対する優位性。このような観点から考えると11～12世紀のフランスには「標準語」は未だ成立していなかったと言える。封建時代には単一の中央政権が存在しなかったことが、単一の「標準語」の未成立の理由である。

ところで、“Chanson de Roland”や“Marie de France”については、それぞれがどの方言に属するかを決定するのは困難である。このひとつの解決策

- (3) М. А. Бородина. Об изучении синтаксиса и морфологии французского языка. «Вопросы грамматики» Изд. Академии наук СССР, Москва-Ленинград, 1960
- (4) Л. П. Новикова. К вопросу о классификации предложных сочетаний в современном французском языке по степени их эквивалентности предлогу. «Проблемы лингвистического анализа» Изд. «НАУКА», Москва, 1966
- (5) Н. А. Катагощина. Исторические предпосылки развития французского письменно-литературного языка. «Язык и общество» Изд. «НАУКА», Москва, 1968
- (6) Jacob Ornstein. Foreign language teaching. «Current Trends in Linguistics» vol. I, Mouton & Co., the Hague, 1963
- (7) Werner Winter. Indo-European. *ibid.*
- (8) 島岡茂「ロマンス語の話」大学書林, 東京, 1970年
- (9) 水野義明「構造主義の評価」, 『明治大学教養論集』通巻40号, 1967年
- (10) 水野義明「ソ連の構造言語学について」, 『明治大学教養論集』通巻46号, 1970年